

令和 5 年度（2023 年度）

第 1 回熊本市生涯学習推進計画策定委員会

議事録

【開催日時】 令和 5 年（2023 年）7 月 7 日（金）15：00～17：00

【開催場所】 熊本市教育センター3 階 第 2 研修室

【出席者】

■ 委員

八幡 彩子 委員長
加藤 貴司 副委員長
田川 智恵子 委員
中川 保敬 委員
原 幸代子 委員
林田 真 委員
萱野 晃 委員
勝谷 知美 委員
松永 裕子 委員
貴田 雄介 委員

■ 事務局

石坂市民生活部長
《生涯学習課》
大石課長
松崎主幹
魚住社会教育主事
福田主査
平野主事

<会議内容>

- ・【議事(1)】次期計画策定スケジュールについて
- ・【議事(2)】次期計画の骨子について
- ・【議事(3)】素案作成に伴う意見聴取について

発言者	発言要旨
	【開会】
市民生活部長	【あいさつ】
	【委嘱状交付】
	【委員長及び副委員長選出（自己紹介含む）】 八幡委員を委員長に、加藤委員を副委員長に選出した。
	【諮問】
【議事(1)】	次期計画策定スケジュールについて 事務局説明
田川委員	市民の自己学習についてのアンケートはどのように周知しているか。
事務局	熊本市のアンケートシステムを活用して実施しており、ライン等を使って周知している。現時点で 1,000 件以上の回答をもらっている。
【議事(2)】	次期計画の骨子について 事務局説明
中川委員	策定委員会というのは、パブリックコメントを行った上で、案を練り直すところまで行うものだと思っていたが、この委員会ではその前の段階で終わるということか。
事務局	この委員会では、ベースとなる素案作りを行う。その後、市民の意見を反映させるが、市民の意見を反映させた素案は、委員の皆様にお返ししたいと思っている。しかし、新たに委員会を開くことは考えていない。
原委員	次期生涯学習推進計画は、5 年ごとの見直しになるのか。
事務局	次期生涯学習推進計画は、次期総合計画に合わせて 8 年間の計画とし、中間年に当たる年に見直しを行おうと考えている。
萱野委員	基本理念のところで、「学びと活動の循環」という記載があるが、社会福祉協議会では、ボランティアの養成講座や成年後見人を養成するための講座を行っている。それに応募される方は、社会貢献したいという思いで応募されるが、その時につくづく感じるのが、学んだことを生かせる場が必要だということ。そのことが学ぶことのモチベーションにつながるだけでなく、実際に学んだことを生かすことで、次の学びにつながると思う。そのため、「学びと活動の循環」というのは、とても大事だと思う。
事務局	地域に還元する仕組みが整っていないことについては、市側も課題として捉えているので、委員の皆様と一緒に考えていきたいと思っている。
萱野委員	骨子の 4 ページに記載してある現行計画の検証について、目標達成できなかった理由として、新型コロナウイルスについては当然だと思うが、新規の取組が上手く実施できなかった理由はどのように考えているか。
事務局	新型コロナウイルス感染症の影響により、新しい取組を他団体にお声かけをすることが難しい状況だった。また、事務局側も新型コロナウイルスの対応に職員が駆り出され、どこの部署も人員が削減されており、当時は今ある業務のどこを残すかという話をしていた状況だったというのが大きな理由である。

発言者	発言要旨
萱野委員	コロナ禍で得た成果を生かしながら、次期計画の中ではコロナのようなことが発生しても、ある程度計画を進められる方策も考えていらっしゃるのだろうなと思った。
事務局	公設公民館でも Wi-Fi を設置して環境を整えたり、タブレットを導入したりして、コロナ禍でも工夫しながらやってきた部分もあるため、次期計画には、それを拡充させた形で取組として盛り込んでいきたい。
八幡委員	ICT に関しては、市役所は DX 化を進めていて、いろいろな市役所のサービスを利用する上でも、ある程度 ICT が使えないと、サービスの利便性を享受できない。市役所改革の中で、必要性に迫られた人たちに学んでいただく場を設けている。ぜひそのような市役所内部での取組も関連付けて、必要性があるところに効果的に学びの場が設定されているかということも考慮してもらいたい。
原委員	学校部活動が地域クラブ活動へ移行する動きがあるが、部活動は子どもたちの多様な学びの場として重要だと思う。生涯学習推進計画は、子どもから大人までという幅広い捉え方をしていることから青少年もスポーツや文化活動ができる生涯学習計画であってほしい。 熊本市文化協会が立ち上がり、今後、区役所毎の文化協会も設立されると聞いているので、是非連携を図っていただきたい。 骨子の 11 ページに「女性人材リストの活用」とあるが、高齢化社会で、性別にかかわらず地域社会で多くの方が活躍されていることから、幅広い人材の活用が大切だと思う。
八幡委員	現在若い人の人材不足という状況となっているため、地域の活力を高めていくためには、60 代を中心とする方たちが、生涯での経験を生かして社会的に活動していただける場を充実させていくことが大事だと思う。 学校については別の計画があるとのことだが、今学校の方も社会に開かれた教育課程ということで、社会や地域との関連性を重視した教育課程になっている。学校の学びをより豊かにするために地域や社会とどのように連携するか、また、学校の学びがその後の生涯学習というものにどのようにつながっていくのかという視点も取り込んでもらいたい。
貴田委員	教育に関しては、効果が出るまでに時間がかかると感じている。今回の計画についても、効果が出るのは 10 年後かもしれないため、幅を持った検証をしていかなければいけないと思う。 検証指標の達成度を測るアンケートについて、文字で書かれている部分（自由記述）からヒントが得られるかもしれない。そのため、質的な質問を入れた方が良いのではないか。
八幡委員	人によっては学ぶことが好きで、必ずしも社会貢献につながることを目的として学んでいる訳ではない方もいる。どこの段階で評価項目に挙げるのかについて委員の皆様から意見をもらいたい。

発言者	発言要旨
勝谷委員	学ぶ内容によっては、それを実践したいという気持ちが出てくるのは確かにある。ある程度活動の場の想定があって学びを始める場合と、自分の興味や満足を満たすために学ぶという場合があると思う。 骨子の7ページに「幸福度が上がること」とあるが、これはどのように確認するのか。
事務局	幸福度を測る指標については市側も悩んでおり、委員の皆様からアイデアをいただきたい。 なかなか幸福度を測る指標はないが、検証指標ア、イ、ウの数値が上昇することで幸福度が上がるのではないかと考えている。
勝谷委員	取り組んだ人は少なからず満足しているのだろうと思うが、取り組んでいなくても満足している方もいるため、「幸福度」はとても悩ましい言葉だと思った。
事務局	学習というと、座学のイメージが強いと思うが、まちづくりや友達づくり、家事、散歩など、普段の生活が生涯学習だと思っている。 生涯学習と聞くと公民館での講座をイメージされる方が多く、普段の生活が生涯学習だと気づいていない市民が多くいると考えている。 生涯学習推進計画という名前自体が硬いため、生涯学習を身近に感じてもらうためのサブタイトルを付けたいと考えている。サブタイトルやアンケートの内容についても委員の皆様からご意見をいただきたいと思っている。
八幡委員	学校教育の中でも、ウェルビーイングという言葉が掲げられるようになっており、そのイメージを社会教育に当てはめると、すべての人がそれぞれの立場でよりよく社会に関わったり、いきいきと過ごせたりするイメージを描いている。その辺りの理念についても、それぞれの立場から、どのように目指す人間像を掲げ、それに向けて生涯学習というツールがどのようにあるべきか、というところも、追って委員の皆様から意見をもらいたい。
事務局	基本理念を「学びと活動の循環」にしており、検証指標ア、イ、ウそれぞれが上昇し、循環することによって幸福度が上がるのではないかと考えている。 なかなか難しいが、そこも含めてご意見いただければと思っている。
中川委員	計画というのは、目標から降りていくという仕組みになっていると思うが、逆から（現場から）考えていかないといけない。ただ講座をして学びができたから循環していくという話ではなく、そこに活動の場所づくりを入れていかないと循環しないと思う。 豊かな生活とは、具体的にどのような項目としてイメージしているのかが見えない。具体性がないため、地域の人が見たときに生涯学習についてのイメージが湧かない。もう少し個人のウェルビーイングと活躍する場面を分けながらイメージ化していくことが重要だと思う。 抽象的な豊かさというのをできるだけ具体的に分かりやすく置き換えると、計画がみんなに分かりやすいものになると思う。

発言者	発言要旨
加藤委員	骨子の 7 ページに「課題として残っている、生涯学習の成果を生かせる社会に重点を置くこととする。」とあるが、これは昔からの課題であるため、ぜひ 8 年間で取り組めるようにして欲しい。 「デジタル化など社会の変化に順応するために必要な学びを支援する。」とあるが、これは今の旬の課題である。これから特に若い人たちにとっては大事なことになるため力を入れてほしい。 補助金の申請もオンライン化が進んでいるが、申請をしている人は高齢者が多く、申請が面倒でしない人もいる。市役所もサポートをして欲しい。
事務局	オンラインという言葉聞くだけで敬遠される高齢者の方もいらっしゃるの で、そのような方々を下支えするような取組を掲げていきたいと考えている。
林田委員	リスキリングやリカレントの教育施設は、民間業者も多いと思うため、民間を巻き込まないことには大きな変化はない。ただ、昔ながらのお稽古の延長線上の民間施設は減ってきている。これは、文化の多様性が出てきたことも理由のひとつとして挙げられる。 民間業者をどのように活用して計画を推進していくかを計画に盛り込んでもらいたい。
田川委員	幸福度について、婦人会の会員は幸福度が高い。なぜなら、自分たちで学習の場を持って、それを発表する（活動する）場を自分たちで作っているからである。行政が学ぶ内容や活動の場所を押し付けるのではなく、自分で自主的に学び、どのような場所で地域に還元するのかなどというのが婦人会では循環している。循環するためには楽しさが一番だと思う。 家でも生涯学習ができるということを周知して欲しい。
【議事(3)】	素案作成に伴う意見聴取について 事務局説明
原委員	資料 4 の 2 番について、NPO 法人が高齢者や不登校生徒にも手を差し伸べていることから、行政だけで担うのではなく、民間活力を活用するような連携を取っていただければと思う。
八幡委員	不登校生徒について、学校の状況を松永委員にお聞きしたい。
松永委員	不登校対策について、熊本市では大江や植木、新町の指導員がいる場所に行って、自学等を行うというものがある（フレンドリー教室）。また、そこに行くのは難しいが、オンラインでつながって配信するものを受けるといったものがある（フレンドリーオンライン）。その他、学校それぞれの対応もある。
八幡委員	大学では、ユア・フレンドという事業があり、大学生が閉じこもりがちな子どもたちの話し相手となって、少しずつ社会性を伸ばしていこうという取組をしている。それをどう社会的なところにつなげるかについては課題があるかもしれない。

発言者	発言要旨
勝谷委員	今熊本市内に外国の方の人数が 7,000 人を超えており、今後 TSMC や技能実習制度の改正等の関係で、さらに増えると思われる。 国際交流事業団では、毎週子ども達へ日本語の指導と教科指導をボランティアで行っており、教育現場での教育指導には限界があると思う。 学校教育では、日常会話が話せるくらいになると、日本語の理解ができるということで、日本語指導が終了する。小学 3、4 年生くらいで終了すると、その後に新たに学ぶ語彙や表現について定着しない。そのまま中学校に進学し、成績が追いついていかないという状況がある。 今後はこういったことも社会教育として、地域である程度、居場所も含めてサポートできるのではないかと思う。 地域の皆さんも自分たちの地域の姿を学ぶ機会があっても良いと思う。自分の地域にどれだけ多様な方が住んでいるかを知ると、学びへの意欲につながると思う。
事務局	計画の前半部分（策定の趣旨や現状、課題）に委員の皆様からいただいた意見を可能な限り反映させ、次回の委員会でお示ししたい。 具体的な取組は、どうしても行政がやっている取組を紹介する形にはなるが、民間や NPO の活用にも触れることができると良いと考えている。
萱野委員	検証指標の結果をどう捉えるかが悩ましいところだと思う。幸福度は主観的なものであるため、分析が難しい。そのような目標とするならば、具体的な取組の検証数値をしっかりと考えて、なぜ幸福度が上がらなかったのか、生涯学習の至らないところはどの部分なのかが分かるようにして欲しい。 生涯学習の定義が人によって違うため、事例を書くことも必要かもしれない。また、効果についても人によって捉え方が違うため、効果の定義も具体例を書く必要がある。
事務局	検証指標アについては、委員の皆様十分に意見をお聞きした上で設定したいと考えている。あと 3 回委員会を開催していく中で、ふさわしい指標が設定できればと思っているので、この件に関しては次回お示しすることは難しい。
原委員	「効果」というと結果を出さなければいけないという印象を与える気がする。そのため、「生涯学習に参加して良かったと思うこと」等、柔軟な問いかけが良いのではないか。
中川委員	アンケートの取り方について、やったことの結果を聞く方が良いと思う。 人づくりや地域づくりについて具体的に項目化しないと結果は出せない。抽象的にやってアンケートで聞いても政策的ではない。 生涯学習は広すぎて、全てをおさえることは難しいため、ある程度限定をしないといけないと思う。 中間見直しでは、良かった悪かっただけでなく、プラスしていくことが大事である。 他の計画とどのような関係があるのかがなかなか見えないため、住み分けを明確にした方が良い。

発言者	発言要旨
貴田委員	アンケートをするときに生涯学習に狭めて聞かないと、すべて生涯学習で解決できると捉えられてもそれは違うと思う。 生涯学習に参加している人に対して聞いた答えと、参加していない人に聞いた答えを同じように考えると、やっていることと結果がつかないようにになってしまうのではないかと思う。
	【閉会】